

国際ハインリッヒ・シュッツ協会

日本支部事務局ニュース⑳

2017年7月15日

[電子版]

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

設立 1965年3月28日

支部長 正木光江
事務局長 荒川恒子

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部事務局ニュース編集 荒川恒子

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部の歩み(10)

さて「支部」の歩みをお知らせし始めて10回目、5年が経過しました。行きつ戻りつ、過去と現在が交錯し思い出すままに、といった記事になっております。そろそろ時の流れに乗せてお知らせすべく心掛けなければ、と考え込んでいます。しかし筆者が自ら皆様と共有した出来事、また支部長初め、先輩のメンバーにお教えいただいたこと等を忘れない内に、といったせつかな気持ちもあります。あと数回お付き合いいただければ幸いです。

2015年12月発布の第17号の「歩み」の一節をもう一度、御紹介させていただきます。「正木光江さんが事務局長として仕事を始められたのは1967年の時で、メンバー数は21名でした。そして1975年に発布された名簿には、なんと84名が列挙されます。しかし翌1976年には17名(1名は死亡)、1977年にも11名、1978年には1名が退会されています。その後は本協会の会員数は増えることはなく、毎年徐々に減少し、1993年度には35名、2000年の名簿には30名の記載があります。その原因の一端には会費の問題があると、正木支部長は推察されます。日本支部が設立された折の会費には、特別処置として割引料金が適応され、1200円でした。1968年から1976年までは本来の1500円が徴収されました。しかしレートの変動その他の様々な理由から、1977年にほぼ二倍の2700円に値上げされました。その頃は毎年楽譜やLP等が配布されました。(中略)1979年から毎年1冊のヤールブーホ(年鑑)が発行されることになり、今日まで継続されています。このような本部の方針展開は、会費値上げ、会員の減少と関わりがあるのかもしれませんが。

以上のように会員数の変動をまとめるに際し、正木支部長からいただいたメールの中の「シュッツ年鑑配布になってから、東京藝術附属大学図書館が団体会員となり、1985年度に慶応大学と桐朋音楽大学が団体会員に加わりました」という一節のもつ深い意味を読み飛ばしておりました。特に桐朋学園大学にはわざわざ出向き、入会をお勧めなさったはず。それもあってか、2011年に桐朋学園大学附属図書館が、難しい経済状況におもんばかり、退会をお申し出になられた時は、やむをえないこととはいえ、正木支部長の気持ちにはお寂しいものがありであったはず。2015年3月30日の日本支部50周年懇親会に合わせて作成してくださった「日本支部略年譜」にも、この事は特記されています。さらに後になって団体会員になられたのは、東北学院大学宗教音楽研究所(今井奈緒子所長)です。それは高齢を理由に退会を申し出られた楯 功様と関わることなのです。楯 会員は1972年12月10日の支部会合にも、その御名を連ねておられる大先輩の会員です。筆者が事務局をお預かりすることになってまもなく、「高齢なので身の整理を始めた。本協会を去るのは本当に残念で忍び難い。何か良い方法はないか思案したが、皆様に御迷惑をおかけしないよう、自分の気持ちなどに囚われていけない」とお考えを伝えてこられました。あまりにも残念でしたので、会員であった証に、何か御言葉を事務局ニュースにお寄せいただけないか打診いたしました。ちょっとビックリなさった御様子で、「退会にあたって、そのような義務があるのですか」とお問い合わせがありました。「御無理を申しあげるつもりはありませんが、長らく会員であられたからには、シュッツに寄せる何等かのお気持ちがおありではないかと感じますので、若輩にお伝えいただければありがたい」とお伝えしました。しばらくしてから、ではということで、手書きの味わい深い原稿が届けられました。美しい間合いをワープロ原稿に落とし入れるのは、ためらわれることでした。そのゆらぐ気持ちが思わず落とし穴になり、写し取る際に小さなミスを犯しました。楯 様にとっては、それは些細なことではありませんでした。お伝えになりたい意志が曲げられてしまうからです。即座に御親切な中にも断固とした強い調子で、原稿をしっかりと読み取るべきであると、御説明と御講釈をいただきました。それは2008年7月発布の事務局ニュース②に掲載されています。しかしニュースの発布はことのお喜びで、今後それを受け取れない立場となったことを、寂しいと思いますとお便りくださいました。会計担当の山下道子さんと御相談して、その後もニュースをお届けし、その度に御丁寧なお便りをいただいております。しかしそれがぷつぷつと途切れしました。御気持ちに御負担にならないように、と静かにお別れをいたしました。その時は楯 様の御退会が様々な所に波及するなどは、全く知りませんでした。

しばらくして東北学院大学宗教研究所で所長をお務めの今井奈緒子さんから、御連絡をいただきました。「少しずつ研究所の体勢などを整えているのですが、その中に楯 功先生御寄贈のシュッツ関係のレコードや年鑑が沢山あります。とても大切な御品で、改めて感謝の気持ちで一杯です」とのこと。しかし今後はもう御寄贈はないのです。自分達でこれ引き継がねばと考え、団体会員として登録なさりたいとの御申し出でした。楯 様とは

個人的に面識のない山下道子さんと私は、「どのような方かしら。哲学それとも神学、なんかそのようなものの御専門臭いはね」などとお話ししあったものでした。あたらずとも遠からずの推測だったようです。先生は御自分が目を通された後、その品を全て東北の地に贈られたのです。ということもあり目下団体会員は3大学です。今回「歩み」をお届けするにあたり、なぜ楽譜やLP から年鑑の配布に変わった時に、音楽関係の図書館が団体会員登録をなさり、逆に多くの個人会員が退会されたのか考え、もう一度名簿を調べてみました。

1975年9月1日現在ということで、50音順に記載された名簿の作成には、正木支部長はどれほどの御時間と神経をお使いになったことでしょうか。今私はパソコン上をバタバタとキーを叩いています。依頼した方からメールに添付されて届く原稿を、カット・アンド・ペーストし、その他の埋め草をざっと仕上げたら、読み直しをして自ら校正すれば、数日で事務局ニュースは出来上がります。しかし当時の名簿作成の手順はどのようなものだったのでしょうか。

名簿を開くとまず本部事務局の住所、そして会長としてフェッテルレ Vötterle さん、副会長としてゲーデヴィル Gudewill さんとブロッデ Brodde さん、顧問にはエーマン Ehmann さんとフレミヒ Flämig さん、秘書としてフレリヒ Fröhlich さんが続きます。そして50音順で日本の会員のお名前、住所、電話番号、職業が記載されています。お住まいは東京に37名、京都、大阪、神奈川にそれぞれ7名、兵庫に5名(4名は姫路市在住)、埼玉に4名、千葉、愛知、奈良に各3名、北海道、秋田、山形、長野、岐阜、鳥取、大分、長崎に各1名と広範囲に及んでいます。ある地域にまとまって住んでおられるのは、大学や地域の音楽サークルなどでの知り合い同志なのでしょうか。事務局長は会員ひとりひとりに、お手紙を送り安否を気遣い、御住所の確認、情報の変更等をお問い合わせなさっておられた訳です。

職業覧をみてみますと、音楽を生業とする方は勿論ですが、様々な大学で学ぶ学生達、お医者さま、理系の研究所務めの研究者、教師が目立ちますが、一般企業に務める会社員や自営業の方もおられます。この覧が空白になっている方は、就活をなさっておられるか、まだ学生さんなののでしょうか。またそこにはメンバーの洋画家中本達也さんが1973年に、詩人尾崎喜八さんが1974年に逝去された旨も記載されています。このような会員の存在、また今では想像もつかないほど多くの方が、国際シュッツ協会日本支部に入会を求められたのです。その理由のひとつには初代支部長 服部幸三氏の存在が大きいと感じます。氏は1960年から早朝6時台に、NHK FM 番組「バロック音楽のたのしみ」のパーソナリティを務めておられたのです。氏の落ち着いた音声、穏やかで分かりやすい口調は多くのファンを得、この番組を目覚まし代りに聴いた方が沢山おられます。まだ生でバロック音楽を聴く機会の少なかった全国の老若男女にとっては、バロック音楽、シュッツの音楽に触れるわずかな、貴重な機会であったはずですが。しかし本協会会員橋本周子さんが所長を務める聖グレゴリオの家が設立されたのが1979年、教会音楽科、古楽科が開設され、聖歌隊が発足したのは1980年。筆者がバロック・アンサンブル「ムジカ エテルナ 甲府」を設立したのは1979年暮のことです。我国で自らバロック音楽の演奏に携わったり、生演奏を聴くチャンスが増えてきた時期と、本協会の会員減少はクロスするのです。

なお名簿の最後に、会費を毎年7月末日までに振り込むこと、住所や勤務先が変わった時には変更を届け出ること、新人会員を御紹介くださる際には、必ず御氏名、御住所にふりがなをつけること、および Herr, Frau, Fräulein を明記することとあります。日本語の固有名詞を全てアルファベットに書き換え、ドイツ本部にお届けなされた事務局長、正木光江さんの御苦労の一端が伺えます。

国際ハインリッヒ・シュッツ協会は学会ではありません。その長い生涯を学びに費やし、最後まで新しい境地を切り開いた人、中部ドイツの先人達の音楽から学び、同時代の他国の新しい音楽、特にイタリアの音楽と接して興奮を隠せなかった人、ドイツ語に音楽付けし、この言葉を見事な音楽語とすることに成功した人、後に続くドイツの音楽家に大きな影響を与えた人です。そればかりでなく彼の音楽、精神はいつの時代の音楽家にも大きな影響力をもっています。毎年開催されるシュッツ祭では、シュッツの音楽が中心に置かれはします。しかしルター派キリスト教と音楽の関係、シュッツのバック・グラウンドにある先輩達の音楽、彼と同時代の音楽家との関係、彼に続くザクセンやテューリンゲンの音楽家達、現代の音楽とシュッツの音楽の関係等に関わるコンサート、講演、彼の生きた足跡を辿る小旅行や見学等が、絡みあわされています。事実どの地で開催される大会でも、掲げられた主題に基づく講演、コンサート、シュッツと関わる地や場所の見学や説明、最後の礼拝で共に歌う合唱作品の練習があります。参加者は家族ずれ、シュッツを初めとするバロック音楽愛好家、ドイツ文化が好きな方、音楽学者、演奏家、聖歌隊員、教会関係者等、その立場は非常に広く、参加目的も様々です。従って講

演も新しい学説の発表というより、主題との関連において知らせたい内容、多少高級で専門的なお話といったものです。毎回この大会に参加していると、シュッツの音楽、生きた時代、生涯等を、本で読み知るといった表面的な捉え方ではなく、「百聞は一見に如かず」という言葉を実感させられるのです。自分は音楽家ではない、とかシュッツを研究主題としていない、といった狭い考え方をする必要は全くないのです。メンバーを繋げているのはたった一点、シュッツや彼の音楽が好きということで充分なのです。その意味で、1975年の時点での日本支部の会員のあり方は素晴らしかったのです。しかしシュッツの音楽と言語、特にドイツ語が不可避の関係にあることもまた否めません。そこで一般には「国際」と冠する団体の公用語が英語に移りつつある現代でも、この協会本部のホームページはドイツ語のみ、講演もほとんどがドイツ語、参加者は全員ドイツ語で会話することになります。なお本部から配布される小冊子『アクタ・サギタリアーナ』は、善意の会員の御尽力で英語、フランス語でも読むことができます。

1970年代の日本の多くの会員にとってのメリットは、シュッツの音楽のレコードや楽譜を入手できることにあったはずです。理屈っぽい、悪文の学術論文を辞典片手に読むために入会した訳ではないはずです。ドイツ語の問題は、今でも他の言語を母国語とする会員のネックになっています。日本支部では、この問題を多少なりとも解消し、以前のようにバロック音楽、シュッツの音楽に心打たれた多くの人々に、御一緒に大会に参加したり、彼の音楽に深い共感を持っていただけるよう、努力をし続ける必要があると感じます。そのために嬉しいニュースがあります。ここ数年来、ドイツ・バロック音楽を専門とする少壮の音楽学専門家が数名、本協会に入会されています。今回はその中のお一人、佐藤康太さんと彼の研究内容を御紹介いたしましょう。

佐藤康太さんはドイツのハレ大学に留学中に、国際ハインリッヒ・シュッツ協会のメンバーになりました。そして2015年10月1日—4日にドレスデンで開催されたフェストに参加されました。その後ハレ大学に博士論文を提出され、2016年10月26日に、主査W.Hirschmann氏（ハレ大学教授）、副査M.Maul氏（バッハ・アルヒーフ、ライプツィヒ）のもと、口頭試問に合格し、博士号を授与されたのです。今は帰国され、若手音楽学者として、張り切って仕事を始められています。ここに佐藤氏の論文の要旨をお知らせいたしましょう。なお本論はMagdeburger Telemann-Studien 叢書の一環として、Olms社から出版予定です。

(事務局長 荒川恒子)

博士論文

会員 佐藤康太

タイトル: テレマンの教会カンタータにおけるレチタティーヴォ様式

Telemanns Rezitativgestaltung in seinen Kirchenkantaten

本論文は、これまで音楽史研究において「童話の継母が継子を扱うように stiefmütterlich」(Martin Ruhnke 1976) 扱われてきたレチタティーヴォの様式研究の基礎を築くことを目的として、18世紀において模範的と言われたゲオルク・フィリップ・テレマンのレチタティーヴォを包括的に分析し、その様式的特徴と変遷を明らかにするものである。中でもテレマンが生涯に渡って定期的に作曲を続けた教会カンタータを分析の対象とし、それ以外のジャンルについては簡単に触れるにとどめた。しかしテレマンの場合、教会カンタータの数は膨大なものになるため、その中から6つのカンタータ年巻 (*Geistliches Singen und Spielen* 1710/11; *Französischer Jahrgang* 1714/15; *Harmonischer Gottes-Dienst* 1725/26; *Fortsetzung des Harmonischen Gottes-Dienstes* 1731/32; *Musikalisches Lob Gottes* 1744; *Engel-Jahrgang* 1747/48) を選び出し、これに1754年以降のカンタータ58曲 (これらはいわば単発のカンタータであり、様式的に統一されたカンタータ年巻を構成しない) を付け加えたものを主要な対象とした。さらにその間隙をできる限り埋めるため、この他に3つの年巻

(*Concerten-Jahrgang* 1716/17, 1720; *Sicilianischer Jahrgang* 1720/21?; *Behrnd-Jahrgang* 1736/37) を副次的な分析対象として扱った。この3つについては年巻に含まれるカンタータすべてではなく、テレマン批判版選集 (Telemann-Ausgabe) の中で楽譜が出版されているカンタータに限定した。

分析の結果、成立年代によってテレマンのレチタティーヴォは大きく様式を変えていることが判明した。様式

は年代ごとに大きく3つに分けることができる(1710-24, 1725-1753, 1754-1767)。初期のカンタータ(1710-24)においては、テレマンはレチタティーヴォの詩行に極めて忠実に曲をつけている。これはアンジャンブマンやアレクサンドリーナー詩行など、文法上コンマの必要のないところでも詩法上句切りの発生する箇所明確に見て取ることができる。テレマンは初期においては句切りの箇所に休符を置き、詩行の構造を明確に音楽化している。その他初期の特徴としては歌唱声部に跳躍が多いこと、アリオーソが頻繁に挿入されること、詩行の韻律と音楽の拍節を合わせるために頻繁に十六分音符や四分音符など、八分音符以外の音価が使用されることなどが挙げられる。*Harmonischer Gottes-Dienst*以降(1725-1753)、テレマンのレチタティーヴォはより自然な話し言葉に近い様式へと大きく変化する。行末やアレクサンドリーナー詩行の句切りはコンマが必要とされない限り無視され、音楽から詩の構造を把握するのはほぼ不可能となる。同時に歌唱旋律は明らかに跳躍が少なくなり(これは旋律の構成音程の統計調査から証明できる)、音価においても八分音符の占める割合が明確に大きくなる。晩年(1754年以降)にはこの傾向がさらに顕著になり、旋律の流れを阻害する四分音符を減らし、休符も十六分休符を積極的に用いるようになる。さらにはフランスのレチタティーヴォから学んだ拍子変化も韻律と拍節の調整のために使用され、より一層滑らかな語りが目指されている。

一般にレチタティーヴォは、特にリズムに関して「楽譜にとらわれる必要のない」ジャンルと言われるが、本研究はテレマンがいかに関心し、熟慮の上でレチタティーヴォを作曲していたかを明確に示すものである。テレマンは生涯に渡ってレチタティーヴォの作曲法を追求し続け、休符の置き方1つにさえ大きな注意を払っている。本研究で初めて具体的に明らかになったこの事実は、レチタティーヴォの上演においても——少なくともテレマンの場合——書かれた音符を決して軽視すべきではないことを示している。

ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京40年の軌跡(17)

会員 淡野弓子

西暦2000年を二千年紀の最終年とみなすか、または三千年紀の始まりなのかについては議論があったようですが、12年計画で1989年10月に始まった〈シュッツ全作品連続演奏〉は第12年次、即ち最終年を迎えました。2000年の12月15日にシュッツ《降誕物語》をもって主要作品の演奏を終了し、2001年からは特殊な単独作品(当時の状況では古楽器編成が困難であるもの)を楽器調達の様子を見乍ら進めて行こう、というのが年頭に立てた大よその計画でした。整理をかねてこのシリーズで1999年11月までに演奏された作品を挙げておきます。

1989・10・6	東京カテドラル	Op.2 ダヴィデの詩編曲集 全26曲
1990・9・6	東京文化[小]	Op.4 カンツィオーネス・サクレ 前半20曲
1990・12・21	石橋メモリアル	Op.8 小宗教コンチェルト集Iより
1991・6・2	石橋メモリアル	十字架上の七つの言葉 / Op.3 イエス・キリストの復活物語
1991・10・22	東京文化[小]	Op.4 カンツィオーネス・サクレ 後半20曲
1992・3・18	東京カテドラル	マタイ受難曲
1992・6・11	武蔵野市民[小]	Op.1 イタリア風マドリガーレ全19曲
1993・3・24	東京カテドラル	ルカ受難曲
1993・10・5	カザルス	Op.6 シンフォニエ・サクレ Iより / Op.7 音楽による葬送 / Op.9 小宗教コンチェルト集 IIより
1995・3・3	武蔵野市民[小]	ラテン語マニフィカート / Op.9 小宗教コンチェルト集 IIより
1995・4・5	カザルス	Op.13 12の宗教歌(後半6曲随時) 前半6曲
1995・9・8	東京カテドラル	Op.5 ベッカー詩編 全153曲中8曲を紹介演奏
1996・2・4	ヴォーリーズ他	随時本郷教会にて Op.9 小宗教コンチェルト集 IIより
1996・3・27	東京カテドラル	ヨハネ受難曲

1996・10・4	東京カテドラル	Op. 11	宗教合唱曲集 全29曲 (ピースとして随時)
1997・9・29	東京カテドラル	Op. 12	シンフォニエ・サクレ III より
1998・4・13	カザルス	Op. 12	シンフォニエ・サクレ III より
1998・4・18~2000・4・22	本郷教会・上荻	Op. 14	ベッカー詩編 Op. 5 増補
1998・9・18	東京カテドラル		白鳥の歌[遺作：詩編 119/ 100/ マニフィカト]
1999・9・28	武蔵野市民[小]	Op. 6	シンフォニエ・サクレ I より
1999・11・5	東京カテドラル	Op. 7	音楽による葬送

というわけで、2000年は次のようなコンサートで始まりました。

シュッツ全作品連続演奏 [その23] (12年計画・第12年次)

〈受難楽の夕べ〉4月5日(水) 19:00開演 東京カテドラル聖マリア大聖堂

I. ハインリヒ・シュッツ (1585-1672) HEINRICH SCHÜTZ

〈詩編とコンチェルト〉

- 主よ、汝の幕屋に住むは誰ぞ Herr, wer wird wohnen in deiner Hütten
詩編 15 編 (SWV 466)

2つの5声のアンサンブル[アルト/バス/弦3声]+[ソプラノ/テノール/

トロンボーン3声] Bc 石塚瑠美子 S/ 依田卓 A/ 淡野太郎 T/ 石井賢 B +4声合唱

- おお、主なる神よ、憐れみたまえ Erbarm dich mein, o Herr (SWV 447)

少年ソプラノ/ ヴァイオリン/ ヴィオラ/ トロンボーン(A・T・B)/ チェロ Bc

II. フーゴー・ディストラー (1908-1942) HUGO DISTLER

《コラール受難曲》■CHORAL PASSION[ア・カペラ]

イエス：宮原昭吾 福音史家：淡野太郎 ピラト：石井賢 ユダ：春宮哲

大祭司：星野正人 強盗：大森雄治 二人の偽証人：依田卓/ 淡野太郎

III. ハインリヒ・シュッツ (1585-1672) HEINRICH SCHÜTZ

シンフォニエ・サクレ 第三集 (1650) より 三つのコンチェルト

- 見よ、この幼子は運命のために定められている (SWV 401) Siehe, dieser wird gesetzt zu einem Fall

2挺のヴァイオリン/ 5重唱 [淡野 S/ 石塚 S/ 依田 A/ 淡野 T/ 石井 B] Bc

- どうか主よ、わたしたちに救いを (SWV 402) O Herr hilf, lass wohl gelingen

2挺のヴァイオリン/ 3重唱 [淡野 S/ 石塚 S/ 淡野 T] Bc

- 天にましますわれらの父よ[主の祈り] (SWV 411) Vater unser, der Du bist im Himmel

2挺のヴァイオリン/ 5重唱 [SSATB]/ 4声合唱 3本のトロンボーン Bc

IV. ハインリヒ・シュッツ (1585-1672) HEINRICH SCHÜTZ

《イエス・キリスト 十字架上の七つの言葉》■DIE SIEBEN WORTE JESU CHRISTI AM KREUZ

イエス：淡野太郎 TII 四福音史家：石塚瑠美子 S 依田卓 A 大森雄治 T 石井賢 B

左の強盗：依田卓 右の強盗：石井賢

器楽アンサンブル：ヴァイオリン I・II/ 3本のトロンボーン/ チェロ/ ヴィオローネ/

オルガン

アンサンブル・サギタリウス——声楽と古楽器による

淡野弓子 指揮/ S 石塚瑠美子 S 依田卓 A 淡野太郎 T 大森雄治 T 石井賢 B

瀬戸瑠子 Vn 渡邊慶子 Vn 諸岡範澄 Vc 西澤誠治 Vne

飯塚睦彦 Trbne A 萩谷克己 Trbne T 喜多原和人 Trbne B 菅哲也 Org. p

ハインリヒ・シュッツ合唱団 (ソプラノ I : 8名 同 II : 8名 アルト : 8名

テノール : 5名 バス : 7名) シュッツ少年合唱団 (6名) 計 : 42名

今、この記録を見乍ら、どうしてこのような大きなプログラムが組めたのかとただただ驚いています。毎年受難節には苦勞を覚悟して実力をやや上回る作品に挑戦してきたのですが、フーゴ・ディストラー (Hugo Distler 1908-1942) の《コラール受難曲》は中でも困難な曲でした。全編ア・カペラで四福音書からの記事が朗唱と合唱によって進められ、場面毎にコラールが挿入されている、という構成です。しかもそのコラールは素朴なものから凝った造りのものまでそれは変化に富みかつ難曲揃いなのです。ディストラーはシュッツの受難曲の型をベースにバッハの受難曲に出現する「コラール」というジャンルを加え、さらに、バッハがコラール・カンタータで用いたさまざまなコラールのアレンジに触発されたのか実に念の入った変奏を完成させました。さらにディストラーの作品には、彼自身の心の奥に潜むただならぬ恐怖感、苦悩といったものが語られている情景の奥に透けて見え、私たちはキリストの受難に加えてディストラーの苦しみにも直面することとなるのです。ディストラーはルター以来のドイツ・プロテスタント音楽史のなかでも極めて高い価値を持つ作品を遺し、それらは何度でも演奏したい名曲揃いなのですが、彼の悲哀をとともに背負うことが出来るのか、自信を持って歌える日が来るのか、はなはだ心許なく我ながら情けなく思う次第です。

さて、私たち日本人が西洋の音楽に携わると、まずは他国語で歌う、ということに常に向き合わされ、自分たちの困難は勿論のこと聴き手にも多くの忍耐を強いているだろうとの、ある種の後ろめたさのような気持ちから解放されることがありません。

シュッツやバッハの音楽は、言葉がそのまま旋律やリズム、和声に密着し、ある言葉を歌うと同時に形造られる立体的な音の身振りのようなものが心身に迫ってきます。放たれる母音によって変わる倍音構造は、そのまま作曲者の意図である事に気付かされます。母国語に訳して歌うと、このような各音、各和声のエネルギーが変わり、作曲家の求めた音楽の動的な部分がかかり失われてしまうのです。しかし日本語で歌えそうな西欧の音楽の音型をいろいろ探ってみますと、最も納まりにくいのは、しっかりした機能と和声の音楽、最も違和感の少なかったものはグレゴリオ聖歌風の旋律でした。そこで私たちは4月15日、本郷教会の Soli Deo Gloria で一つの試みに挑戦したのです。それは、シュッツの受難曲の朗唱部分を日本語で歌い、合唱部分はドイツ語を残すという試みです。シュッツの受難曲はこの実験にもってこいの素材でした。朗唱部分の日本語は杉山好訳(口語)を用いました。聴き手の皆様が普段より緊張、集中され、成功だったと思います。

続くコンサートは聖霊降臨節を祝うプログラムで開催されました。

シュッツ全作品連続演奏 [その24] (12年計画・第12年次)

〈聖霊降臨節の音楽〉 6月16日(金) 19:00開演 東京カテドラル聖マリア大聖堂

ハインリヒ・シュッツ (1585-1672) HEINRICH SCHÜTZ

Da pacem, Domine	(SWV 465)	主よ、平和を与え給え	2重合唱9声部+Bc
Benedicam Dominum	(SWV 267)	われら主を称えん	シンフォニエ・サクレ I より
Exquivisi Dominum	(SWV 268)	われ主を求めし時	同上
Meister, wir wissen	(SWV 414)	皇帝のものは皇帝に	シンフォニエ・サクレ III より
Seid barmherzig	(SWV 409)	慈愛深くあれ、人を裁くな	同上
Christe fac ut sapiam	(SWV 431)	キリストよ、われに叡智を	交唱歌2つの4声合唱
Veni, sancte Spiritus	(SWV 475)	来れ、聖霊よ	4重合唱 器楽9声を含む16声+Bc

～～Pause～～

フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ Felix Mendelssohn-Bartholdy (1809-1847)

Vespergesang Op. 121 男声合唱+チェロ+コントラバス

ヨハン・ゼンバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750)

Also hat Gott die Welt geliebt カンタータ Nr. 68 (BWV 68)

神はその独り子を給うほどにこの世を愛された（聖霊降臨節第2日のためのカンタータ）

淡野弓子 指揮 ハイน์リヒ・シュッツ合唱団/ シュッツ少年合唱団
サギタリウス 徳永ふさ子 S 石塚瑠美子 S 依田卓 A 淡野太郎 T 石井賢 B
渡邊慶子 コンサートマスター 森田芳子 Vn 渡部安見子 Va 西澤央子 Vc/ Vc picc
大軒由敬 Vc 前田芳彰 Vne 濱田芳通/ 細川大介 Cto 川村正明 Ob 江崎浩司 Ob/Dulcian
尾崎温子 Ob/ Ob da c 飯塚睦彦/ 萩谷克己/ 喜多原和人 Trbne 菅哲也 Org.p

新約聖書使徒言行録の第2章第1節から5節には、要約すると、激しい風の音とともに炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、ほかの国の言葉で話し出した、との驚くべき情景が伝えられています。私はこの箇所を読むと非常にホッと、先へ進む勇気を与えられるのです。

聖霊降臨の情景が伝えているのは、人間の脳内には、自らの認識を超えた能力が潜んでおり、常識的には理解不能と思われることでも、ある種の刺激、この場合は聖霊が働くという神の側からの介入によって、普段は喋らない言葉を喋り、お互いに理解し合ったという霊妙な現象が起こったということです。そして音楽とは、自分だ、と思っている普段の自分が解放され、驚くべき自分に変容する時空を現出させるのではないか、との思いがこのペンテコステという祝祭のときを迎える度により強くなって行くのを覚えるのです。

シュッツの《来たれ、聖霊よ》は小教会コンチェルト集にも1曲4声+Bcのものが収められていますが、この日演奏したのは、四重合唱で器楽9声を含む重厚にして華麗な16声部におよぶ大曲でした。

バッハのカンタータ68は私たちが創立以来愛唱しているシュッツのモテット《Also hat Gott die Welt geliebt 神はその独り子を給うほどにこの世を愛された》の言葉を元とした翻案詩（ザロモ・リスコフ1675）による合唱で始まるのですが、シュッツの冒頭の二つの和声 A1 (A a c¹ e¹ a¹) → so (e gis h e¹ h¹) で神が独り子をこの世に賜った、という事実を強烈に表現したのに対し、バッハは、d-Moll 8分の12拍子で弦楽にオーボエ族を重ね、ホルンがソプラノ・パートをなぞるといふ麗らかな音楽で、イエスの牧者としての面を強調したものです。私たちがシュッツの音楽を通して知った多くの聖句が、後の世の作曲家によって思いがけない変貌を遂げるさまに接すること、これもシュッツ音楽の与える喜びのひとつと申せましょう。

さてこの年、三宅島では6月末から7月、8月にかけて大規模な火山爆発が起き、9月初めには全島民が島外へ非難しました。また9月には東海地方が激甚なる大雨被害を受けました。私たちは難曲揃いの《シンフォニエ・サクレII》を演奏しようと決心し、覚悟をもって次のコンサートに臨んだのです。

シュッツ全作品連続演奏 [その25] (12年計画・第12年次)

《Symphoniae Sacrae II 1647》 9月22日(金)19:00開演 東京カテドラル聖マリア大聖堂

ハイน์リヒ・シュッツ (1585-1672) HEINRICH SCHÜTZ

[合唱]

1. 天は神の栄光を語り Die Himmel erzählen die Ehre Gottes (SWV 455)
ハイน์リヒ・シュッツ合唱団 Vc 大軒由敬 Org.p 瀬尾文子
2. 主よ、わが言葉聴きたまえ Herr, höre mein Wort (SWV Anhang 7)
S 柴田圭子/ 石塚瑠美子 A 依田卓/ 影山照子 T 淡野太郎/ 大森雄治
B 影山智/ 石井賢 ハイน์リヒ・シュッツ合唱団 Vc 大軒由敬 Org.p 瀬尾文子

[独唱と器楽]

3. わが心は定まりました Mein Herz ist bereit, Gott, daß ich singe (SWV 341) (Nr. 1)
MS 永島陽子 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 Vne 西澤央子 Org.p 菅哲也
4. 主よ、わたしたちの主よ Herr, unser Herrscher (SWV 343) (Nr. 3)
T 大島博 Cto 濱田芳通/ 細川大介 Vdg 中野哲也 Org.p 菅哲也
5. 主はわたしの力である Der Herr ist meine Stärke (SWV 345) (Nr. 5)
S 石塚瑠美子 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 Vne 西澤央子 Org.p 菅哲也

6. わたしは死ぬことなく、生き長らえて Ich werde nicht sterben, sondern leben
(SWV 346) (Nr. 6)
S 徳永ふさ子 Ob 川村正明/ 尾崎温子 Vdg 中野哲也 Org.p 菅哲也
7. わたしは心を尽くして主に感謝する Ich danke dir, Herr, von ganzem Herzen
(SWV 347) (Nr. 7)
MS 羽鳥典子 Ob 川村正明/ 尾崎温子 Vdg 中野哲也 Org.p 菅哲也
8. 主よ、わたしはあなたを慕う Herzlich lieb, hab ich dich, o Herr (SWV 348) (Nr. 8)
CT 依田卓 Ob 川村正明/ 尾崎温子 Vc 大軒由敬 Org.p 菅哲也
9. 手を打ち喜びの声を挙げよ Frohlocket mit Händen und jauchzet dem Herr (SWV 349) (Nr. 9)
T 大島博 Cto 濱田芳通/ 細川大介 Vdg 中野哲也 Org.p 菅哲也

[合唱]

10. 主よ、いまこそこの僕を Herr, nun lässest du deinen Diener (SWV 433)
ハインリヒ・シュッツ合唱団 Vc 大軒由敬 Org.p 瀬尾文子

[重唱と器楽]

11. 神は立ち上がり敵を散らされる Es steh Gott auf (SWV 356) (Nr. 16)
S 徳永ふさ子/ 淡野弓子 Cto 濱田芳通/ 細川大介 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子
Vdg 中野哲也 Org.p 菅哲也
12. ルビーが美しい黄金の縁に輝くように Wie ein Rubin in feinem Golde leuchtet
(SWV 357) (Nr. 17)
MS 永島陽子 CT 依田卓 Ob 川村正明/ 尾崎温子 Vdg 中野哲也 Org.p 菅哲也
13. あなたのパンを喜んで食せ IBt dein Brot mit Freuden (SWV 358) (Nr. 18)
MS 羽鳥典子 Bar 淡野太郎 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 Vne 西澤央子 Org.p 菅哲也
14. 二つのことをあなたに願います Zweierlei bitte ich, Herr von dir (SWV 360) (Nr. 20)
T 大島博/ 淡野太郎 Cto 濱田芳通/ 細川大介 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子
Vdg 中野哲也 Org.p 菅哲也
15. 主よ、あなたの天を傾けて Herr, neige deine Himmel und Fahr herab (SWV 361) (Nr. 21)
Bar 淡野太郎 B 石井賢 Ob 川村正明/ 尾崎温子 Vdg 中野哲也 Org.p 菅哲也
16. 義しき者たちよ、主を喜べ Freuet euch des Herren, ihr Gerechten (SWV 367) (Nr. 27)
CT 依田卓 T 淡野太郎 B 石井賢 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 Vne 西澤央子
Org.p 菅哲也

[合唱]

17. それはまことのまことである Das ist je gewißlich wahr (SWV 277)
ハインリヒ・シュッツ合唱団 (ア・カペラ)

ご覧のようにこんなに沢山の方々のご協力を戴いてやっと実現したコンサートでした。

《シンフォニエ・サクレ II 1647》はドイツ語のテキストによる独唱 (Nr. 1~12)、2重唱 (Nr. 13~22)、3重唱 (Nr. 23~27) にそれぞれ2声部の器楽と通奏低音のついたコンチェルト集です。1曲のなかで器楽パートが弦楽器から管楽器へ代わったり、歌詞の内容に従って楽器の種類がさらに変化したりと、楽器の持つ音色や特性が前面に打ち出され、また言葉なき楽器の雄弁性が強調され、どの曲を見ても「シンフォニア」という言葉の意味を良く伝えていきます。因に《シンフォニエ・サクレ I 1629》はラテン語による3、4、5声の曲集で全20曲、《シンフォニエ・サクレ III 1650》には第一集、二集の編成に任意のとはいえ2重合唱や器楽合奏が加えられた大掛かりな曲が21曲収められています。第三集の歌詞はすべてドイツ語です。

基本的に1パート1人なので各奏者に相当の実力が要求され、かつアンサンブル能力も問われますので慎重な人選が必要です。今から17年前にすでにこれだけの方々々が協力して下さい、ほとんどの方が今もこの分野では無くしてはならぬ演奏者として現役で活躍されているのは同慶の至りですが、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者の中野哲也

さんが逝かれたのはかえすがえすも残念です。明朗闊達、スポーティな中野さんのお人柄はそのまま音楽に反映され、スイスイと上声部をリードされる彼ならではの通奏低音は類い稀れなものでした。生演奏の記憶というものはいろいろな思い出のなかでも、強くまた永続性のあるものだということに気付かされております。

秋。レクイエムの季節を迎え、なんと私たちはブラームスの《Ein deutsches Requiem ドイツ(語)レクイエム》を採り上げることとなりました。ブラームスはそれまでの伝統的なラテン語の歌詞は用いず、すべてをルター訳のドイツ語聖書から拾い集め、一編のレクイエムのテキストを編み作曲したため、タイトルに "ein" を付け、《"ある" ドイツ語のレクイエム》としたのでしょう。

その聖句はどれも実に強く真っ当で、ブラームスがドイツ・プロテスタントの人であり、ルターを信頼し、彼がどれほど深くシュッツ、バッハ、ヘンデルといった先達の音楽に学んだかがはっきり伝わってきます。このコンサートのチラシには、表面の背景にドイツ語の歌詞全てが、裏面にはその日本語訳が印刷されています。久しぶりにこのチラシを見て当時の興奮を思い出しました。

魂の慰めのために〈レクイエムの集い〉

11月10日(金) 19:00 開演 東京カテドラル聖マリア大聖堂

《ドイツ・レクイエム》Op. 45 ヨハネス・ブラームス JOHANNES BRAHMS (1833-1897)

ソプラノ アグネス・ギーベル Agnes Giebel バリトン 淡野太郎

指揮 淡野弓子

ハインリヒ・シュッツ合唱団

シンフォニア・ムシカ・ポエティカ [コンサートマスター 瀬戸瑤子]

Vn I 荒川以津美/ 小田透/ 平林瑞恵/ 杉本真弓

Vn II 谷口哲朗/ 高田はるみ/ 平井義久/ 保科由貴/ 小杉芳之

Va 浦川宣也/ 榎本崇浩/ 長岡晶子/ 中島久美

Vc 嶺田健/ 松澤春樹/ 西澤央子/ 大軒由敬

Kb 西澤誠治/ 高山健児/ 大津三男

Picc 澤田直人 Fl 朝倉未来良 [I]/ 菊池香苗 [II]

Ob 川村正明 [I]/ 庄司知史 [II] Kl 坂本徹 [I]/ 佐々木麻衣子 [II]

Fg 霧生吉秀 [I]/ 高橋あけみ [II] K.Fg 越康寿

Horn 井出詩朗 [I]/ 佐藤太郎 [II]/ 野上知子 [III]/ 上田貴子 [IV]

Trp 神代修 [I]/ 安藤真美子 [II] Trb 飯塚睦彦 [A]/ 萩谷克己 [T]/ 喜多原和人 [B]

Tuba 松下晃一 Timp 岡田全弘 Harfe 高田真理子/ 奥田恭子 Org 菅哲也

これだけのモダン楽器の奏者にお集まり戴き、合唱は総勢70名という恐らく合唱団始まって以来の人数でした。OB会員に加え、普段お付き合ひ戴いていた国分寺チェンバークワイア、沼津合唱団の方々が個人参加して下さった結果です。そして、ギーベル先生は79歳という御歳でケルンから東京へ空路はるばるおいでくださったのでした。

静かな興奮に包まれ無事終了した演奏会でした。第5楽章ではギーベル先生が渾身の力とともに „Ihr habt nun Traurigkeit, aber ich will euch wieder sehen 今あなたがたは憂いのうちにあるが、わたしはふたたびあなたがたに会う “ と歌い出されたその声はすでにエーテルと化して満場に漂いました。ギーベル先生は「いままで幾度となくこの作品を歌ってきたが、こんなに名曲だと思ったのは今夜が初めて」と仰り、感激もひとしおでした。この夜の、絶唱ともいえるソロ、アグネス・ギーベルの魂そのものと言ってよいドイツ語表現を忘れる人はいないでしょう。

11月14日(火) 午後2時~4時には日大芸術学部にて〈アグネス・ギーベル声楽講座〉が開かれました。大学院生を対象に行なわれものでしたが、ギーベル先生の教えは根本的なことを徹底的にというものですので、直ぐに出来るようなことではないのですが、道の向うに光が見えるといった本当の希望を与えられたのではないのでしょうか。丹羽勝海教授も大変に喜ばれ、次回は日本声楽発声学会での講座を、との申し出をされました。

同日の午後7時、ルーテル市ヶ谷教会で〈鍋島元子追悼コンサート〉が開かれました。鍋島元子さんと「衝撃と安息のスペース」で共演した、濱田芳通、山岡重治、渡邊慶子、平尾雅子の諸兄諸姉に、このシリーズで共演して下さったアグネス・ギーベル女史、鍋島先生からチェンバロを学んだ武久源造さんも加わってテーマ、フォンタナ、グランディ、シュッツなどを演奏しました。ほかにも小池耕平、桜井茂、梶山希代、加久間朋子、曾根麻矢子、武久源造諸氏によるソロやアンサンブルが深い憶いとともに演奏されました。

～～～唐突ではありますがここで悲しいお知らせです。ギーベル先生は今年、2017年4月24日天に召されました。95歳でいらっしやいました。先生と共に在ったかけがえのない時間、そこで戴いた教えと愛は、すべて私たちの細胞となって日々息づき、私たちを生かしています。安らかに、やすらかにお休みください。私たちは先生に戴いた生命を大切にもう少し勉強を続けます。～～～

11月25日(日) 午後2時15分～3時15分 東京藝術大学音楽学部第2ホールにおいて日本声楽発声学会のパネルディスカッションが開催されました。パネラーは川上勝功、川合孝夫、山田実の各氏、それに淡野弓子でした。

この場ではシュッツ合唱団メンバーがシュッツ、バッハ、ブラームスにおける同じ歌詞による作品を実際に歌いながら音色の違いを比較し、その違いの理由を検討しました。また合唱団自体の音色は、他の声に合わせるといった発想から生まれるものではなく、一人ひとりが各自の声帯を完全に使うというゴールに向かう過程で、各個人のそれぞれに異なった音色の融合であるというデモンストレーションをしました。17年前のことで、現在はさらに進んだ考えをもとに訓練していますが、発声の分野で「合唱」が採り上げられたのは喜ばしいことでした。

いよいよ12月、シュッツ連続演奏は次のようなクリスマス音楽となりました。

シュッツ全作品連続演奏 [その26] (12年計画・第12年次)

〈2000 降誕祭の音楽〉 12月15日(金)19:00 開演 東京カテドラル聖マリア大聖堂

淡野弓子 指揮 ハインリヒ・シュッツ合唱団/ シュッツ少年合唱団/ アンサンブル・サギタリウス

ハインリヒ・シュッツ(1585-1672) HEINRICH SCHÜTZ

1. 門を広く開けよ Machet die Tore weit 2重合唱8声部 ア・カペラ (Anh. 8)

S 今村ゆかり/ 柴田圭子 T 淡野太郎 シュッツ合唱団

2. わが心定まりて Paratum cor meum (SWV 257) 《シンフォニエ・サクレ I》より

T 淡野太郎 Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 Vdg 中野哲也 Org.p 菅哲也

3. 全地よ、主に喜びの叫びをあげよ Jubilate Deo, omnis terra (SWV 262)

《シンフォニエ・サクレ I》より

B 石井賢 Rec 濱田芳通/ 淡野太郎 Vdg 中野哲也 Trb [B] 喜多原和人 Org.p 菅哲也

4. わが魂は主を崇め Magnificat Meine Seele erhebt den Herren (SWV 344)

《シンフォニエ・サクレ II》より

S 石塚瑠美子 エコー 今村ゆかり [I]/ 柴田圭子 [II]

Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 Cto 濱田芳通/ 中村孝志 Trbne 飯塚睦彦/ 萩谷克己

Rec 江崎浩司/ 淡野太郎 Vdg 中野哲也 Org.p 菅哲也

5. 言は肉となって Verbum caro (SWV 314) 《小教会コンチェルト集 II》より

S 淡野弓子 [I]/ 石塚瑠美子 [II] Org.p 菅哲也

幸あれマリアよ、恵まれた方 Ave Maria gratia plena (SWV 334)

《小教会コンチェルト集 II》より

天使[CT] 依田卓 マリア[S] 柴田圭子 カペラ シュッツ合唱団

Cto 濱田芳通/ 中村孝志 Trbne 飯塚睦彦/ 萩谷克己/ 喜多原和人

Vc 大軒由敬 Vne 西澤誠治 Org.p 菅哲也

6. 今日キリストは生まれ給いぬ Heute ist Christus geboren (SWV 439)

S 今村ゆかり S 柴田圭子 CT 依田卓 女声合唱 Vc 大軒由敬 Org.p 菅哲也

7. 今日キリストは生まれ給いぬ Hodie Christus natus est (SWV 456)

Chor u. Solo Ens. シュッツ合唱団 Vc 大軒由敬 Org.p 菅哲也
8. 見よ、天使が現れて Siehe, es erschien der Engel des Herren (SWV 403)
天使 [S] 今村ゆかり Solo Ens. 柴田圭子/ 依田卓/ 淡野太郎/ 石井賢
Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 Vc 大軒由敬 Vne 西澤誠治 Org.p 菅哲也

《クリスマス物語》Historia der Geburt Jesu Christi (SWV 435)
福音史家 淡野太郎 天使 今村ゆかり/ 柴田圭子/ 石塚瑠美子
羊飼い 依田卓/ 影山照子/ 石塚瑠美子
占星術の学者 星野正人/ 斉藤公治/ 大森雄治
祭司長、律法学者 大森雄治/ 影山智/ 阪本一郎/ 春宮哲 ヘロデ 石井賢
Vn 瀬戸瑤子/ 渡邊慶子 Rec/ Cto 濱田芳通/ 中村孝志 Rec/ Dulcian 江崎浩司
Trbne 飯塚睦彦/ 萩谷克己/ 喜多原和人 Vdg 中野哲也 Vc 大軒由敬 Vne 西澤誠治
Org.p 菅哲也

残されていたクリスマス作品と待望の《クリスマス物語》を歌えたことは大きな喜びでした。シュッツは歌詞の内容や人物に合わせてオブリガートの楽器をどんどん変えてゆくので、ピリオド楽器や奏者の出現を待ち乍ら進めたこの連続演奏ではソプラノ・ソロと器楽の《マグニフィカート「わが魂は・・」》と《クリスマス物語》はやはり最終年まで持ち越されていたのです。声楽のソロ・アンサンブルも易しくはない道ですが、合唱団の歌い手のみで《クリスマス物語》のソロ・アンサンブルを達成出来たことも嬉しいことでした。創立以来の聴き手のお一人、野本元氏からは「骨太のシュッツに満足」とのお言葉を戴き一同感謝でした。

12月23日(土)には本郷教会においてクリスマス・チャリティ・コンサートが催され、シュッツ、プレトリウス、コルネリウス、ブラームスのクリスマス・モテットに羽鳥典子さんのソロで《眠れ、わが子》(バッハ: クリスマス・オラトリオより)、またバッハの《ブランデンブルク協奏曲 第4番》が演奏されました。一体どうやって日々を過ごして来たのか、首を傾げるような1年でしたが、計り知れぬお恵みのうちにこの年も暮れて行きました。(続く)

付記

2000年6月17日は〈SDG〉第80回: この日シュッツの《ベッカー詩編》150曲および第2稿10曲 計160曲を歌い上げました。

2000年〈SDG〉の記録(日付のみ):

1/ 15、1/ 22、1/ 29、
2/ 5、2/ 12、2/ 19、2/ 26、
3/ 11、3/ 18、3/ 25、
4/ 1、4/ 8、4/ 15、4/ 22、
5/ 27、
6/ 3、6/ 10、6/ 17、6/ 24、
7/ 1、7/ 8、7/ 15、7/ 22、7/ 29、
8/ 5、8/ 12、
11/ 18、11/ 25、
12/ 2、12/ 9、
1/ 16 以上31回 いずれも土曜日18:00より。
12/ 23(土) 17:00 クリスマス・チャリティ・コンサート

宗教改革 500 年記念行事

新入会員 市川和子さんが本協会の存在を知るきっかけとなったのは、佐藤 望氏による「ルターの音楽観」の講演を聴講されたことでした。本当に記念の年に相応しい行事が様々な土地で、色々の企画により開催されます。すでに終了したもの、またこれから開催されるもの等があります。本協会会員が関わる幾つかを御紹介しておきましょう。

- ・東北学院大学では、宗教改革・キリスト教学校 500 年周年となった「一般社団法人キリスト教学校教育同盟第 105 回総会」を土樋キャンパスで開催。今井奈緒子さんが「讚美歌の礼拝における役割や奏者のための社会的地位に変化をもたらしたオルガン」についてのお話とオルガン演奏を披露。(2017 年 6 月 9 日(金)、10 日(土))
- ・西南学院では「バッハとルター」と題する集会を開催。今井奈緒子さんがバッハの《クラヴィーア練習曲集第 3 部》を演奏。(2017 年 6 月 17 日)

これから開催される行事

・本協会による第 48 回ハインリヒ・シュッツ祭は「ハインリヒ・シュッツそして宗教改革時代の詩篇曲」を総合主題として、2017 年 9 月 21 日から 24 日までドイツのマールブルク市で開催されます。同市は 1608 年から 1609 年にかけて、シュッツが法学を学んだ地です。なお同市でのフェスト開催は 1972 年、1993 年に続いて 3 回目になります。日本支部からも、正木光江支部長、寺本まり子、佐藤 望、米沢陽子夫妻、荒川恒子その他、多数の会員が参加いたします。

・日本基督教団阿佐ヶ谷教会[宗教改革 500 年を記念した] お話と演奏
バッハ《主をほめよ》(BWV 230)、パッヘルベル《マニフィカト》etc. 会員 中川郁太郎さんが歌唱で、佐藤望さんがお話で参加なさいます。お問い合わせ: 阿佐ヶ谷教会 03-3337-5879

・第 29 回獨協インターナショナル・フォーラム「ドイツ文化とルター その今日性をめぐって」

2017 年 11 月 11 日(土) 11:00-19:00 頃

会場: 天野貞祐記念館大講堂(東京メトロ日比谷線、半蔵門線直通東武スカイツリーライン(獨協大学前(草加松原)西口より徒歩 5 分) 入場無料。

16:00- から「ルターと音楽」と題して木村佐千子さんが講演。(なお 11:00-から宗教改革とドイツ文化に関わる諸主題により 5 本の講演があり、木村さんはその最後の論者です)。その後

17:30 から鈴木雅明とバッハ・コレギウム・ジャパン(12 名編成)により「ルターと音楽」と題してコンサート開催。(先着 500 名。10:45 より整理券配布。無料のため多くの来場者が予想されます。お早目にどうぞ)

コラーレ《Ein feste Burg》《Vom Himmel hoch da komme ich》《Christ lag in Todesbanden》に基づくバロックの巨匠達の作品(Calvisius, Schein, Tunder, Zachow, Bach etc.)の演奏。

詳細のプログラムは、以下に御請求ください。

獨協大学国際交流センター Tel 048-946-1918 E-Mail a-kokuse@stf.dokkyo.ac.jp

会員の活動状況

お申し出いただいたもの、編集部がネット等を通して探したものの等で、2017年後半の活動の内、特にシュツツ周辺、バロック音楽等に関わるものを中心としてお知らせしております。イベント、コンサート、出版物等の御紹介です。出版物に関しては、すでに出版されたものや出版予定のもの等、発表期間に関してはあまり厳格に捉えていません。記載内容に関しては、皆様の御協力をいただき、より正確を期したいと考えております。よろしくお願いをいたします。会員名あいうえお順に御紹介させていただきます。

- 1) 荒川恒子 (お問い合わせ eterna@nifty.com Tel/Fax 045-421-0502)
 - ・2017年5月15日『ヨハン・ヨアヒム・クヴァンツ：フルート奏法』[改訂版] 発刊(全音楽譜出版社)
 - ・2017年7月22日(土) 15:30 於：近江楽堂 ムジカ エテルナ 甲府 第90回定期演奏会 (企画・構成・リコーダー演奏)
 - ・2017年11月26日(日) 15:30 於：山梨県立図書館多目的ホール ムジカ エテルナ 甲府 第91回定期演奏会 (企画・構成・リコーダー演奏)
- 2) 井形ちづる
 - ・2017年7月3日 ミヒャエル・ハンペ著、井形ちづる訳『オペラの未来』 発刊(水曜社)
- 3) 石井 賢 (お問い合わせ ishiim@tkg.att.ne.jp)
 - ・2017年11月20日(日) 時間未定 於：コラニー・文化ホール(山梨県立県民文化ホール) 合唱団コレギウム・アウレウム公演 ブクステフーデ：われらがイエスの御体(BuxWV 75) に独唱・重唱で出演
- 4) 木村佐千子
 - ・2017年6月25日 マークス・ラータイ著、木村佐千子訳『愛のうた バッハの声楽作品 Bach's Major Vocal Works: Music, Drama, Liturgy』 発刊(春秋社)
- 5) 佐藤 望 (お問い合わせ 慶應大学日吉音楽学研究所 Tel 045-566-1359)
 - ・2018年2月6日(火) 18:30 於：協生館 藤原 洋記念ホール 慶応義塾大学コレギウム・ムジクム、アカデミー声楽アンサンブル若手、エキスパート演奏家によるコラボレーション公演 ヘンデル：メサイア(指揮 佐藤 望)
- 6) 淡野弓子 (お問い合わせ ムシカ・ポエティカ Tel 03-3998-8162)
 - ・2017年9月7日—15日にかけてハインリヒ・シュツツ合唱団・東京はドイツ演奏旅行を行います
 - ①2017年9月10日(日)17:00 於：フォルクスワーゲン・ホール、ブラウンシュヴァイク ドイツおよび世界各国合唱団合同による公演 ハイドン：天地創造 (指揮 クラウス・ヘッカー) (ルター宗教改革500年記念演奏会)に参加
 - ②2017年9月11日(月) 於：日独ザール、ベルリン 日独協会合唱団ジョイント・コンサート シュツツのモテット、武久源造：万葉集よりの六つの歌 他(指揮 淡野太郎)
 - ③2017年9月13日(水) 20:00 於：プレーディガー・キルヒェ、エアフルト シュツツのモテット、クライネ・ガイストリッヒェ・コンチェルテ、武久源造、バームのオルガン曲等を演奏 (指揮 淡野太郎、淡野弓子はソプラノ独唱、重唱)
 - ・2017年11月21日(火) 於：三鷹市民文化センター「風のホール」 〈レクイエムの集い〉 シュツツ、ブラームス、レーガー、R. マウエルスベルガーのモテット、シューマン、ブラームスによる追悼歌曲 (指揮 淡野太郎 ハインリヒ・シュツツ合唱団)
 - ・2018年1月14日(日) 14:00 於：練馬文化センターつつじホール(小ホール) 〈シュツツ合唱団創立50周年記念・[1]〉 ハイドン：天地創造 (指揮 淡野太郎 ハインリヒ・シュツツ合唱団・東京/ メンデルスゾーン・コーア 管弦楽 ユキビタス・バッハ)

- ・2018年3月23日(金) 19:00 於: 東京カテドラル聖マリア大聖堂
 (シュッツ合唱団創立50周年記念・[II]) —受難楽の夕べ—
 シュッツ 《マタイ受難曲》 バッハ 《オルガン小曲集》より受難節のコラール
 (指揮 淡野太郎、ハインリヒ・シュッツ合唱団、東京、オルガン 椎名雄一郎)

7) 橋本周子 (<http://www.st.-gregorio.or.jp/>)

- ・2017年9月30日(土)—2018年6月23日(日)まで月1回第4土曜日 於: 聖グレゴリオの家
 ゼミナール「グレゴリオ聖歌 典礼のなかにみるグレゴリオ聖歌セミオロジー その解釈と演奏法および指揮法」

8) 米沢陽子 (お問い合わせ sqq03105@nifty.com)

- ・2017年10月7日(土) 14:00 於: 東京純心大学江角記念講堂
 オルガンレクチャー・コンサート バッハ《オルガン小曲集第2巻》より
 受難節と復活節のコラール(合唱付き)
- ・2017年12月9日(土) 14:00 於: カトリック山手教会
 クリスマス・チャリティ・コンサート (オルガン 米沢陽子)
- ・2017年12月16日(土) 14:00 於: 東京純心大学江角記念講堂
 クリスマス・チャリティ・コンサート (オルガン 米沢陽子、酒井多賀志、ヴァイオリン 天日倫代 他)

事務局ニュース⑱から⑳発行の間に、会員による新刊書が3冊出版されました。皆様にも御紹介いたしたく、発刊の順番で内容を簡単にお知らせさせていただきます。

1) ヨハン・ヨアヒム・クヴァンツ(荒川恒子訳)

『フルート奏法[改訂版]』全音楽譜出版社(2017年5月15日)

原書は1752年に初版が発行されました。いわゆるバロック時代の3大理論書の最初を飾るものです。即ち本書に続いてC.P.E. バッハ著『正しいクラヴィーア奏法』(1753, 1762)、レオポルト・モーツァルト著『ヴァイオリン奏法』(1956)が刊行されました。いずれも特定の楽器の弾き方を教授するようなタイトルとなっています。しかし内容は音楽全般に関わるものです。特にクヴァンツの書にはその傾向が強く、バロック時代に専門の音楽家になりたいと望む者が、如何に広く深い教養と観察力、不断の努力等を要求されるのかが如実に示されます。この3大理論書はいずれも全音楽譜出版社より、2回ずつ翻訳書として出版されました。C.P.E. バッハの著は2回とも東川清一氏の訳によるもので、改訂版となっています。最初の訳書が『正しいピアノ奏法』という題名を付されていることが示す通り、1963年頃の日本ではバロック音楽の認識はまだ浅いものがありました。モーツァルトの『ヴァイオリン奏法』は久保田慶一氏による新訳で、クヴァンツの『フルート奏法』と同時に、本年刊行されました。さてこの『フルート奏法』は、いずれも荒川訳で、40年振りの改訂版新訳となっています。最初の版は筆者の若い時代の訳出、そして本書は人生の終焉のほんの少し手前で、ぎりぎりゴールインといった感じです。大きく変更いたしましたのは、解説としてクヴァンツが学びの時を過ごし、若い頃に音楽上の大きな影響を受けた、ドレスデンに置かれた宮廷楽団(ポーランド王にしてザクセン選帝侯宮廷楽団)の事情を、「クヴァンツを巡る音楽環境について」として付記したことです。ドレスデンはシュッツが楽長として、ゲオルク・フリードリヒ1世時代にイタリア音楽をもたらした地です。そして2, 3, 4世時代には宮廷における音楽、宗教的、世俗的な様々な音楽が提供され、中部ドイツでの文化の中心地となっていきました。その後クヴァンツはフリードリヒ・アウグスト1, 2世時代に、当地で活躍しました。この地を訪れ、自国では見聞きすることのない高い音楽文化に、興奮を隠せなかったのは後のプロイセン王、若かりし頃のフリードリヒ2世でした。ということは、「ドレスデン宮廷」といえば音楽の盛んな地、多くの名曲がザクセン州立、大学図書館に所蔵されている地と捉えられます。それは事実です。しかしフリードリヒ・アウグスト1, 2世という親子の音楽趣味

は全く異なっていました。主としてフランス音楽を愛好した父、イタリア音楽に傾倒した息子。その狭間で様々な音楽趣味、様式が交錯する、まさにるつぼのような状況に置かれたのが宮廷楽団員でした。音楽様式の作曲、演奏における相違といったことは、しばしば聞く言葉です。しかし今日ではその相違を知識として知っていれば、書きわかる、弾きわかることができるもの程度にしか捉えられません。この相違はそんなにわずかなもの、ことだったのででしょうか。当時の現場で働いていた人々の悲鳴、苦悩のようなものが伝わってきます。お手に取っていただければ幸いです。

2) マークス・ラータイ(木村佐千子訳)

『愛のうた バッハの声楽作品』 春秋社 (2017年6月25日)

木村さんのあとがきを引用して、著者と本書の特徴をお知らせしましょう。「ラータイ氏は音楽学やプロテスタント神学を学び、1998年にドイツのミュンスター大学で哲学博士号を取得なさった方で、本書では、神学の知識を活かしてバッハの声楽作品に新たな光をあてておられます。特に「愛」という視点から声楽作品の内容が捉えられているのが特徴です。各章はまとまりのある読み物として書かれており、ご関心のある作品についての章のみ読んでいただくこともできます。原書は英語圏の国々では高い評価を受けており、バッハ愛好家の多い日本でもたくさんの方に読んでいただければと考えております。」全体は8章からなります。

第1章 プレリユード

第2章 女性の声 《マニフィカト》とカンタータ《私の魂は主をあがめ》におけるマリア

第3章 愛の歌から子守歌へ 《クリスマス・オラトリオ》

第4章 神の栄光と人の苦しみ 《ヨハネ受難曲》

第5章 イエスの受難と受難曲の歴史 《マタイ受難曲》

第6章 見ることと理解すること 《復活祭オラトリオ》と《昇天祭オラトリオ》

第7章 オペラと建築の間 《ミサ曲 ロ短調》

第8章 ポストリユード

3) ミヒャエル・ハンペ(井形ちづる訳)

『オペラの未来』 水曜社 (2017年7月3日)

水曜社のホームページに、本書の紹介が掲載されています。それによると、「音楽的側面が興味を中心となっているオペラも、現在は視覚的な側面と演出が大きな部分を占め、作品の潜在的な意味を解明・提示し、新しい生観的な連想さえも付加した独自の芸術的表現として理解されることが多くなりました(中略) それに伴い演出そのものが解釈される必要があります・・・あらすじを舞台で提示するだけでなく、音楽、台本、場面を複合体として光を当て、作品の根底にある意味を明らかにする」ために書かれた書なのです。

最近ではバロック時代のオペラの上演も増えてきました。またその演出の仕方も様々です。本書においてはモンテヴェルディ《ウリッセの帰還》のヘンツェ版についての所見、またバロック時代のオペラ劇場が現存するストックホルム近郊のトロットニング宮殿への言及もあり、興味深い視点を発見していただけると確信しています。